

読書推進運動

郵便番号 162-0828

東京都新宿区袋町6番地
日本出版クラブ会館内

読書推進運動協議会

TEL 03(3260)3071 番

FAX 03(5229)1560 番

発行人 戸畑勇太郎

編集人 片岡 伸子

No.527

(別冊付録付き＝「2011年・第53回こどもの読書週間」行事報告)

定価 60円 (会員の購読料は会費の中に含まれる)



「読書週間」によせて

震災考 ～絵本の力を信じて～

宮城県女川町教育委員会
女川ちやっこい絵本館担当

もとぎ こういち
元木幸市

勤務先の女川町で震災に遭った後、やっと石巻に戻り、自宅待機をしていた。ライフラインは途絶えたまま。そして余震が絶え間なく続く。不安な日々の中、水くみや後片付けの合間に読み始めたのが、柳田邦男さんの『空白の天気図』だった。広島に原爆が落とされたあの年、惨禍に苦しむ人々に、一か月後再び大災害が襲う。枕崎台風である。広島死者は約二千人といわれるが、原爆の陰に隠れてあまり知られていない。細かい活字をむさぼるように読んだ。そして「似ている」と思った。今とである。

『空白の天気図』では、原爆という人災の後に台風という天災が起こった。そして今回は、大地震・大津波という天災と同時に原発事故という人が連動した。発生仕方に違いはあるが、人災である原爆も原発事故も、人間の、特にリーダーの判断や決断の過ちが被害を大きくしたことでは一致する。だから「似ている」と言及したのである。被災地はどこも大変だ。とりわけ、福島は計り知れない。一刻も早く日本国の威信をかけて救ってほしい。

三月末に、教育長から「全国から本がたくさん届いているのだが……」と電話が入った。ガソリンスタンドが開いてから早速行ってみると、小学校の廊下に山と積まれたダンボール箱が待っていた。「絵本館、できないかな」と教育長。箱を開けてみると、子どもたちが喜びそうな絵本がいっぱいある。「やりましようか」と言葉を返す。絵本だけの図書館創設は、今年度実施予定の事業だった。女川町は読書の町づくりを目指して家読(うちどく)運動に取り組みだしたところであり、「町の絵本館」創設はその重要な一歩であった。ところが、この大震災で女川町図書室の蔵書四万冊のすべてが流失してしまった。実現は困難と思っていたが、寄贈本で復活することになった。ピンチがチャンスとなった。

それからの歩みは速かった。生涯学習課職員が一丸となり、ユニセフなどのボランティアの助けを借りながら、本を選び分け、絵本だけを一か所に集めた。約四十五㎡の明るい空間が女川第二小学校のオープンスペースに、「女川ちやっこい絵本館」として誕生した。五月十日のことである。蔵書は約五千冊。決してちやっこい(小さい)とは言えない規模となった。夏休みに入り、外部から出入りできる少し広い部屋に移転し、一般の人たちの利用も増えてきた。今では毎日、休み時間になると、小学生がわれ先に押しかけ、思い思いにこの空間を楽しんでいる。壁には地震の爪あとの亀裂が走っているが、床はカラークッションで敷き詰められ、本棚はすべてカラーボックス。茶色の瓦礫と雑草の中を通学バスでやってくる子どもたちにとって、ここはまるで別世界なのだ。激変した環境の中で、いまだ不安を抱きながら生活している子どもたち、厳しい現実に向き合っている大人たち。今ほど、誰もが心を癒やす時間と場を必要としているときはない。私たちは、絵本でこの町の復興を後押しする。